

自分の道を発見する若い女性

中野 理恵

度肝を抜かれる冒頭だ。ふっくらして目鼻立ちの整った女性が、髪を乱れ気味にして、イライラしている。迫力ある貌だ。『ペトルーニャに祝福を』の主人公、ペトルーニャである。彼女は大学での専攻を活かす職につけず、アルバイトをしながら就職活動をしていた。そのようなある日、キリストの受洗を祝う〈神現祭〉に遭遇する。〈司祭が川に投げる十字架を見つけた男性は、1年間、幸せに過ごせる〉との伝説にもとづく祝祭だ。祝祭に遭遇したペトルーニャはいきなり川に飛び込むと、屈強な男たちを尻目に、その十字架を取ってしまった！さあ、大変。男にしか許されていない祭りに女が参加しているだけでも、もっての外なのに、十字架まで取ってしまい、「取った」と叫ぶと、どこかに消えてしまったのではないか。集まった男たちの怒りは収まらない。司祭はおろおろするばかり。おまけに「女性が十字架を取るのはどうして問題なのか」と、司祭や警察署長に無遠慮にマイクを突きつける女性レポーターまで登場するではないか。怒りが頂点に達した男たちは、ペトルーニャが保護されている警察署に押しかける…。

現実をカリカチュアライズして描いたのだろう、と思っていたら異なっていた。2014年1月にマケドニアで実際に起きた出来事にもとづいていると知り、驚く。僅か6年前ではないか。マケドニアは旧ユーゴスラビア、つまり、旧共産圏に属する。すると、常々抱いている疑問が首をもたげる。共産主義革命が起きても、変わらずに宗教が日常生活に根付いている社会、つまり宗教の根強さ、にである。〈八百万の神^{やおよろず}〉の国に生まれ育ったためだろうか、この疑問は変わることがない。

女性を不浄とみなし、正当な根拠もなく、男性より劣ると決めつけてきた長い歴史がある。20世紀、特に戦後になり、そのような根拠のない思い込みが揺



『ペトルーニャに祝福を』より
©Pyramide International

らいだとはいえ、まだまだ根強く残っているのが現実だ、と実感させてくれる映画であり、いまだにこのような作品が必要とされる社会なのだ、と痛感した。

もう1本、紹介したい。『ちむぐりさ 菜の花の沖縄日記』である。〈ちむぐりさ〉とは〈肝ぐりさ〉と書く。他人の痛みを自分の悲しみとして共に胸を痛める状態を表現するのだそうである。いじめが原因で北陸能登の町から沖縄に移住し、フリースクールに通う15歳の菜の花さん。同じ学校に通う、現地の〈おじい〉や〈おばあ〉たちとの出会い等を通して、彼女が発見してゆく沖縄の現実と〈自分〉。菜の花さんの表情がいい。引用されるガンジーの言葉「世界を変えるのではなく、世界によって自分を変えられないようにすることだ」に共感する人は多いことだろう。

映画のラスト、降り積もった雪を力強く踏みしだいて進むペトルーニャに菜の花さんの姿が重なる。マケドニアと沖縄、遠く離れた地で〈自分〉を発見し、自分なりの道を歩もうと意志する二人の若い女性。いずれからも希望を与えられる。

《Cinema Information》

『ペトルーニャに祝福を』

北マケドニア・ベルギー・スロベニア・クロアチア・フランス合作映画(100分)
監督: テオナ・ストゥルガル・ミテフスカ
4月25日より岩波ホールほか全国順次公開

『ちむぐりさ 菜の花の沖縄日記』

ドキュメンタリー映画(106分)
監督: 平良いずみ
ポレボレ東中野にて上映中、以後全国順次公開

なかのりえ: 映画プロデューサー、ディストリビューター。(株)パンドラ代表。100本を超える映画を配給し、視覚障がい者のための副音声付商業劇場上映を日本で初めて実現。著書に『すきな映画を仕事にして』(現代書館、2018)等。